

3

国立保健医療科学院蔵書



10012119

男に脅威を與へる 職業婦人調査

生活振り一切を 絶対秘密に市が行ふ

男性を脅かす進出
が婦人の就業調
査を一新する

生活戦線の女性 ひとりものが八割

勤先は丸の内が筆頭
高女出が三割 無学のは少い

職業婦人の最高お給金は タイピストの四百五十圓

平均半から見れば女給は毎
六十圓以下か多の

産業戦線に活躍 職業婦人の調査

帝都の職業婦人 一万六千人

勤務先 獨身等々の調査
勤先は丸の内が筆頭

市の統計課が 職業婦人調査

来月一日から一週間
調査員五千人

職業戦線に立つ 婦人の調べ

近市統計課の手
調査員五千人

女性職業 け分色

勤先の人余千六萬

職業婦人の収入

花やかなげで
意外なその裏面
興味ある東京市の統計

十國一

職業婦人の収入

一寸の暇でできる

職業婦人は何か能くする

球乗馬から 意外なは話曲

女工は偶然雑種もの

長所短所

職業婦人の長所短所

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

市統計課の調査

職業婦人の調査

7892



昭和六年十二月

婦人職業戦線の展望

東京市役所

(一) 性女く往を端尖の業職人婦



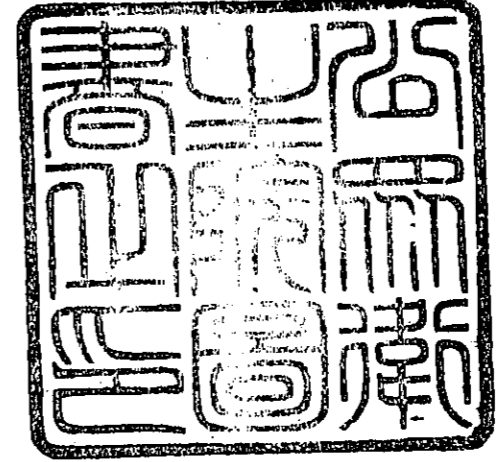
エア
ガール

ガ
ソ
リ
ン
ガ
ー
ル

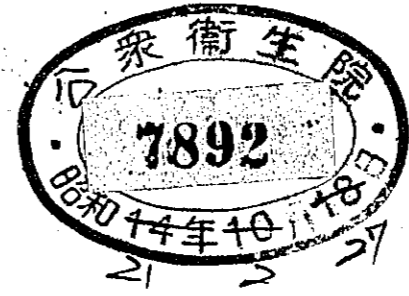
マ
ー
リ
ン
ガ
ー
ル

ミ
ッ
ス
ト
ー
ト
ガ
ー
ル

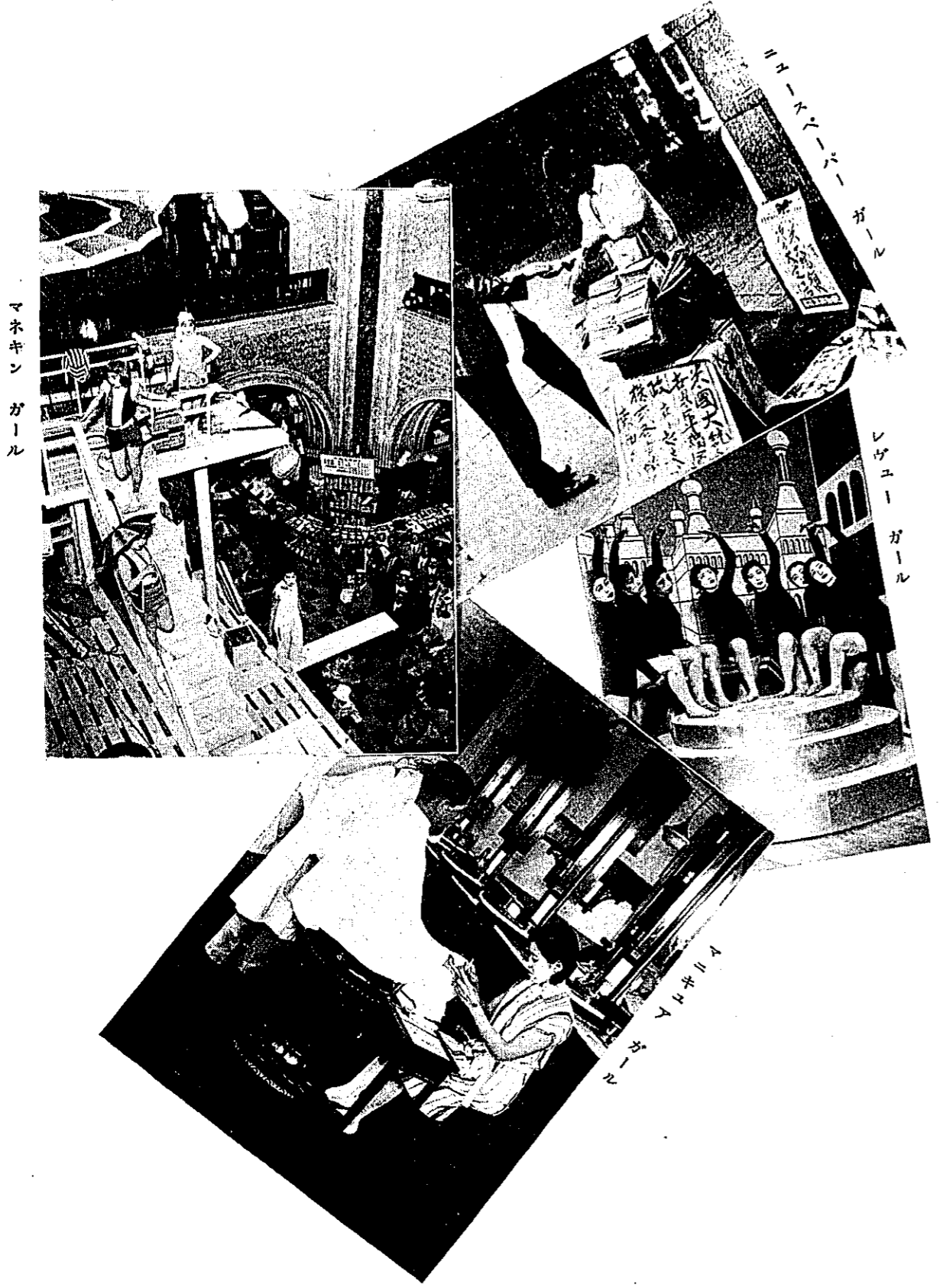
S
3



昭和11年2月27日
川上理一先生
寄贈
厚生省研究所



(二) 性女く往を端尖の業職人婦



はしがき

今を距ること半世紀の昔、北歐の都コペンハーゲンの一劇場から『人形の家』のノラをして全世界に向つて呼ばしめた『私は何よりも先づ人間です』の臺詞は、實に中世暗黒時代よりの婦人奴隸道德に加へた致命的な爆撃であり、又女性解放と自覺とへの雄叫びでもあつた。當時日本では貝原益軒の『女大學』が婦人道德の經典として一世を風靡し『總じて婦人の道は夫に従ふにあり。女は夫を以て天とす。返すくも夫に逆ふて天の罪を犯すべからず』といふ如き盲目的な夫唱婦隨の東洋的美徳が謳歌されてゐた。

併し、明治維新の政治的變革に依つて長い封建思想の冬眠から醒め、泰西文化の攝取に専念しつゝあつた若い日本にも纏てノラの呼び聲が傳はつて來ない筈はなかつた。斯くして『女大學』は『近世女大學』に席を譲り、福澤諭吉の『日本婦人論』、『男女交際論』等が相踵いで婦人啓蒙運動の烽火を上げた。爾來日本女性が今日に至る迄に残した足跡は眞に目覚ましいものがあり、教育界に、産業界に、學界に、藝術界に驚異的な進出を遂げたのである。

斯くて今や我が國婦人工場労働者數が男工數を凌駕するといふ事實は世界の耳目を聳たしむるに至つた。加之、最近女性が筋肉労働より漸次智的労働へその戦線を擴大しつゝあることは顯著なる現象であつて、爲めに男子の職業領域は日に／＼彼女等に依つて侵蝕せられつゝあるのである。叙上の趨勢は社會の進歩、文化の發達より觀て必然的な結果であり、又慶賀すべき現象でもある。

唯茲に深く省なければならぬことは、昭和女性の社會的進出が果して社會の自然的要求と婦人自身の自覺とに出

發してゐるか否かの點である。若しも婦人が單に低給に甘んじて働くが故にその職業分野が擴大されたに過ぎないとしたならば、換言すれば勞働搾取の一形態として男子が産業界から追はれて失業し、女子が之に代つて家庭から驅り出されたとしたならば、這是單り社會經濟上の一大損失であるばかりでなく、家庭生活の健全性を保持する上にも由敷い大事といはなければならぬ。

本調査は近來頗に重要性を加へた職業婦人問題研究の基礎的資料を獲るの目的を以て、本市小額所得階級授職事業の一として行つたものであつて、調査の對象を市内八百十八會社工場及び是等の内に働く婦人産業軍約二萬人に置き、僱主側に對しては婦人の採用方法他十七項目に就き、又被僱者側に對しては家庭關係、勤務關係及び生計關係に就き四十一項目に亘る詳細なる事實を調査した。久しく『開かずの扉』として世人の謎とされてゐた職業婦人の實相は本調査に依つて初めて究明せられたのである。

若しも本調査が勞資相互の福祉増進並びに婦人職業の健全なる發達と産業の繁榮のための各種企畫に資するところあらば編者望外の光榮とするところである。最後に難事中の難事とせられる本事業をして調査票回收成績八割、調査人員無慮一萬六千有餘といふ劃紀的好成績を收め、調査有終の美を遂げしめた會社工場主諸賢並びに婦人従業者諸姉の絶大なる御援助と熱誠なる御同情とに對し衷心感謝の意を表する次第である。

昭和七年一月

東京市統計課

婦人職業戦線の展望

目次

第一編 總 說

第一章 職業婦人の諸問題

- 第一節 職業婦人の意義……………一
- 第二節 職業婦人の發生とその社會經濟上に於ける地位……………四
- 第三節 婦人問題の動向と職業婦人……………一二
- 第四節 最近に於ける職業婦人の趨勢……………二二

第二章 職業婦人調査の計畫及び方法

- 第一節 調査準備……………三三
- 第二節 調査執行……………三七
- 第三節 調査の成績……………四〇
- 第四節 整理集計並びに編纂……………四六

第二編 職業婦人の實相

目次

五

第一章 身上に關する事項

第一節 就職の目的..... 五

第二節 戸主又は夫の職業..... 六

第三節 配偶關係と子供..... 七

第四節 住居..... 七

第五節 年齢..... 七

第六節 教育程度..... 七

第七節 趣味..... 八

第八節 信仰..... 八

第九節 休日の利用方法..... 八

第二章 勤務に關する事項

第一節 就職の方法..... 八

第二節 就職年齢..... 九

第三節 初任給..... 九

第四節 勤続年限..... 九

第五節 轉職程度..... 九

第六節 就業時間..... 九

第七節 公休日數..... 一〇

第八節 通勤方法..... 一〇

第九節 仕事の心身に及ぼす影響..... 一〇

第十節 仕事に對する希望..... 一〇

第十一節 仕事に關する感想..... 一〇

第三章 生計に關する事項

第一節 給料..... 一七

第二節 手当..... 一七

第三節 賞與..... 一七

第四節 扶助..... 一七

第五節 其他の收入..... 一七

第六節 收入總額..... 一七

第七節 被服費..... 一七

第八節 食費及び住居費..... 一七

第九節 家計補助..... 一七

第十節 交通費..... 一七

第十一節 修養費..... 一七

第十二節 娛樂費……………一六

第十三節 貯蓄……………一四

第十四節 其の他の雜費……………一四

第三編 業務別に觀たる職業婦人

第一章 智能的業務……………一四

第一節 事務員……………一四

第二節 店員……………一三

第三節 外交員……………一六

第四節 婦人記者……………一八

第五節 女醫……………一八

第二章 技術的業務……………一六

第一節 タイピスト……………一六

第二節 電話交換手……………一九

第三節 製圖手……………二二

第三章 肉體的勞働業務……………二二

第一節 女工……………二二

第二節 車掌……………二四〇

第三節 劇場案内人……………二五

第四節 掃除婦……………二五七

第五節 給仕……………二六

第六節 食堂給仕……………二七一

第七節 エレベーターガール……………二八〇

第四編 雇主側より觀たる職業婦人

第一章 採用方法並びに勤務關係……………二九一

第一節 募集方法……………二九二

第二節 採用方法……………二九三

第三節 勤務時間……………二九四

第四節 休憩時間……………二九五

第五節 公休日及び休暇……………二九六

第二章 待遇……………二九六

第一節 給料……………二九六

第二節 臨時手當……………三〇四

第三節 賞與……………三〇五

第四節 修養娛樂機關……………三〇五

第五節 共濟互助機關……………三〇六

第六節 醫療施設……………三〇六

第三章 職業婦人の批判……………三〇八

第一節 職業婦人の長所……………三〇八

第二節 職業婦人の短所……………三〇九

第三節 職業婦人に對する希望及び感想……………三一

附 錄 統 計 表

第一章 被傭者側ノ部……………一

第一表 勤務先……………一

第二表 年 齡……………九

第三表 配偶關係及ビ子供……………二

第四表 戶主又ハ夫ノ職業……………一九

第五表 就職ノ目的……………二七

第六表 教育程度……………三一

第七表 信 仰……………三三

第八表 趣 味……………三七

第九表 住 居……………四〇

第一〇表 休日利用法……………四七

第一一表 就職ノ方法……………五一

第一二表 就職年齡……………五三

第一三表 初 任 給……………五五

第一四表 勤 績 年 限……………五七

目 次……………七

第一五表 轉職度數……………五

第一六表 就業時間……………六

第一七表 公休日數……………六

第一八表 通勤方法……………七

第一九表 健康狀態……………七

第二〇表 仕事ニ對スル希望……………七

第二一表 仕事ニ對スル感想(一番樂シク思フコト)……………七

第二二表 仕事ニ對スル感想(一番嫌ニ思フコト)……………七

第二三表 給料……………八

第二四表 手当……………八

第二五表 賞與……………八

第二六表 扶助關係……………八

第二七表 其ノ他ノ收入……………九

第二八表 收入總額……………九

第二九表 被服費……………九

第三〇表 食費及ビ住居費……………一〇

第三一表 家計補助……………一〇

第三二表 交通費……………一〇

第三三表 修養費……………一一

第三四表 娛樂費……………一一

第三五表 貯蓄額……………一一

第三六表 其ノ他ノ雜費……………一二

第二章 雇主側ノ部

第一表 募集方法……………一九

第二表 採用方法……………二〇

第三表 勤務時間……………二〇

第四表 夜間勤務ノ有無……………二一

第五表 休憩時間……………二一

第六表 公休日……………二一

第七表 一般ノ休暇日數……………二一

第八表 結婚ニ依ル休暇日數……………二二

第九表 分娩ニ依ル休暇日數……………二二

第一〇表 忌引ニ依ル休暇日數……………二二

第一一表 其ノ他ノ休暇日數……………二二

第一二表 給料最高額……………二三

第一三表 給料最低額……………二三

第一四表 給料平均……………一四

第一五表 昇給期間……………一五

第一六表 臨時手当……………一七

第一七表 賞 與……………一八

第一八表 修養娛樂施設……………一五

第一九表 共済互助機關……………一四

第二〇表 醫療施設……………一五

第二一表 婦人従業者ノ長所……………一七

第二二表 婦人従業者ノ短所……………一五

第二三表 婦人従業者ニ對スル希望及ビ感想……………一六

婦人職業戦線の展望

第一編 總 說

第一章 職業婦人の諸問題

第一節 職業婦人の意義

早乙女の田植歌、機を織る梭の音、春の野邊には茶摘歌、また軒毎に訪ね行く販女、あるひは荒浪ぐるる海女などに、いづれ昔なつかしい働く婦人の姿は偲ばれるのである。

けれども今や、養蠶と紡績とは世界的産業に數へられ、國の盛衰を背負ふものであるが、その大半は全く婦人の力によるものである。

國運の隆盛と共に興る凡百の工業には約百萬の女工群が働いてゐる。幾千百の銀行、會社を初めとして、事務所、百貨店に、自動車、電車に、病院、劇場に婦人の姿が見出されないとこころはない。多かれ少かれ婦人の織手は働いてゐるのである。實に婦人は産業の力となつてゐる。

なほその外にも、官公署に、教育界に、婦人は働いてゐる。かくて社會の各部門に次第に婦人の進出を見るに至り、今や何れの方面に於いても確固たる地歩を占むるに至つたのは事實である。

かくて、いはゆる職業婦人の存在は、單に經濟問題に限らない。今や幾多の社會問題を含んでゐるのである。職業婦人の發生、その現状、並びにその種類を考へてみるに、まことに複雑多岐にしてその意義を捉へることは仲々に困難である。けれども、こゝに婦人職業戦線を展望するに當つて、まづいはゆる職業婦人とは何か、といふその意義について、少しく考へて見ようと思ふのである。

職業婦人といふのは、何か一定の職業を有してゐる婦人である。

職業を有してゐるといふ以上は、まづ報酬を得ることを目的とするものである。好意やお禮心で働くのとは違ふ。その爲めに一定の勞務を提供し、一定の契約關係に立つのである。これが職業として働くといふことの常態である。

そうして、また職業といふ以上は、臨時的であつたり、あれやこれやといふのでは無くて、大體一定した仕事をなすものである。

また職業といふものは、社會的な意味を持つてゐる。その働きが社會の人にそれと認められるものである。その人はその仕事をなすものであるといふ豫想の下に置かれてゐる。そして何分かの社會的な効果を與へるものである。私事的にまた一時的に働くことは、普通に職業とは云はない。

尤も、社會的といつても、その仕事の直接の目的が何も社會の爲めといふのではない。直接の目的は報酬を得るにあるのである。社會の進歩や改善を直接の目的とするものは、社會事業家か社會運動家である。けれども、その仕事の性質が或る社會的效果を持ち、社會に一定の働きをなすものであると認められるものといふ意味である。

更に職業婦人といへば、普通自分の家庭を出て外に働くものである。勿論自家に在つて働く職業婦人もあることはある。この家庭を離れて働くといふところに實は大層深い意味があるのであつて、これは職業婦人の發生については大いに關係

がある點である。また實際に職業婦人の多くは、家庭を離れて働いてゐるのである。

かくの如くにして、職業婦人とは一定の社會的職業を有する婦人を云ふのであり、更に詳しく云へば、報酬を得るために、自家を離れて、一定の雇傭關係の下に、勞務を提供する婦人をいふとも云へよう。

更に、職業婦人と、男子が職業を持つてゐるのと比較して、その前者の特徴とするところを述べてみよう。

一定の職業を持ち、家庭を離れて、他人に雇はれ働く場合、その外見が甚だ男子と相似てゐて、婦人たることの外には何等差異は認められなく見えても、婦人はやはり家庭の人であると思はれる。第一義的には家庭の人である。勿論、婦人も出で、社會的職業につくことは有る。けれども職業に生き職業に死するといふ點に於いては、まづ男子に譲るべきであらう。すなはち、男子は社會的に働くといふことが第一義であり、家庭といふものは第二義である。

また家計について考へてみるに、男子の收入獲得の目的は大體に於いて家計全體の補填にある。けれども婦人の場合は例外を除いては、まづ家計の補助である。

この意味に於いて、婦人の職業に對する態度が自ら異つて来る。また社會もこの點を意識して、その待遇に於いて差等をつけるのである。更に婦人の就職の目的を實際に調べてみるとやはり家計の補助である。勤務状態についても、婦人は家庭的、身體的な障礙が比較的多く、その結果は能率にも影響を來すといふことが認められ、勤務年限は短く、異動はげしく、不熟練である等々の理由からして、その結果は給料や總收入に於いて低く、昇進遅く、地位が恵まれないといふことになる。

勿論、近代の意味に於ける職業婦人の進出は極く最近の事である。それに現代の社會制度や經濟組織の下に於いては、

婦人は概して困難な立場に立つものであるといふことは事實である。そこで、一部の人は、新しい社會に於いて婦人が完全な獨立と自由とを享有するに至らば、婦人の地位は少くとも現状より遙かに向上するであらうと豫言する。さうなれば職業婦人の意味も自ら變らざるを得ないが、併し目下の處では職業婦人については、右に述べたことを以て満足しなければならぬと思ふ。

更に本書に於いて職業婦人といふのは、右に述べた様な一般的なものではない。もつと限定された意義のものである。すなはち、「帝都に於いて資本金五十萬圓以上の銀行會社及び職工三十人以上を使用する工場に從事する婦人従業者」と限つてゐる。すなはち、東京市内に本店、支店を有する銀行會社中、その代表的なものとして、公稱資本金五十萬圓以上の銀行、會社と職工三十人以上を使用する工場、すなはち比較的大きな銀行、會社、工場等約一千箇所に勤務する婦人従業者約二萬人である。

勿論、これ以外にも所謂産業婦人は數多くあるし、それに官公署又はその工場等に勤務するもの、病院や婦人派出所等に働くもの及び學校教職員等をも除外してゐる。けれども、こゝには諸種の事情からして、まづ出來得る限り帝都の産業を代表する處に働いてゐる婦人、すなはち産業上の力を示すものとして充分なものを選んだのである。

この意味に於いて、また帝都の職業婦人の實情を示す點に於いて些の遺憾はないと思ふのである。

第二節 職業婦人の發生とその社會經濟上に於ける地位

右に述べた意味に於ける職業婦人の發生を考へてみよう。まづその前提として、しばらく女中と家政婦とについて兩者を比較してみようと思ふ。



女中は、今日なほ數多くの家庭に在るものであるが、これは限定された意味での職業婦人には這入らない。そして、この女中から發達したものと思はれるところの家政婦や派出婦が、普通職業婦人として考へられるのである。今その理由を少しく述べて見よう。

極く最近まで、女中といへば多くは上流中流家庭に在つて行儀見習をなし、旁々幾分の貯蓄をなしてその將來に備へるものであつた。またその家庭にしても、その身上の世話までもしてやるといふ、いはゞ準家族員たる待遇を與へたものである。また、それ以下のものでは、年期を限つて奉公をなし、幾らかでも自家の口減しをしようとか、行儀見習をするとかいふものに過ぎなかつたのである。従つて休暇といつてもはつきりとしてゐないで、盆と正月位が、せいぜい彼女らのふた開けであつた。要するに女中といふものは、その第一の目的が報酬を得ること、そのことに在るのではない。

ところが昨今のいはゆる家政婦はどうであるかといふに、これは確かに女中の職業化したものであり、それから發達したものであるが、しかしこれは決して温い準家族員關係にあるのではない。一定の報酬を目的として、ある限られたる時間とその勤務先きの家庭に於いて働くといふのである。またその家庭としても決して將來のことや身上のことなどを心配してやるといふものではない。この意味では家政婦も他の職業の事務員や店員など、全く同じである。

この職業化の傾向といふものは益々けしくなつてゆくのであつて、丁度丁稚小僧でもこの頃は、報酬を目的とするものが多くなつたといふのと同じである。

要之、女中は家政婦、派出婦となることによつて職業化し、純然たる報酬を目的とする雇傭關係に立つものとして、近代的意味の職業婦人となつたのである。

これは單なる一例に過ぎないが、職業婦人の發生を考へるに當つては適例であると思ふのである。

この様な意味での職業婦人を發生せしめた原因は何處にあるか。それは仲々複雑な關係に在るものであらうけれども、

まづ大體に於いて二つに分けられると思ふ。一つは社會的な事情、他は經濟的な事情である。

ノラが「人形の家」を出た。これは因循姑息な家庭の絆を断ち切つて、人としての自由を求めて街頭に飛び出したのである。これが婦人解放の最初の烽火のひである。とに角時代の動きは自由を求め、個人主義の擡頭は家族制度の建て直しとなり、また男性社會に對する挑戦となつたのである。

西歐の婦人解放の聲は、文化吸收に血眼な極東の一國にも、直ぐ傳へられる。古くはミルの婦人解放論、ペーベルの婦人論の如き巨彈が放たれる。オーグスト・ストリンドベルグが新しい「人形の家」を發表して母性擁護の筆陣を張り、エレン・ケイの戀愛と結婚に關する新しい意見は忽ちにして天下を風靡した。ア・コロンタイは赤い戀と同時に、婦人労働革命を叫んで、「婦人の地位は、常に彼女の經濟上の職分によつて決定される」といふに至つた。婦人労働の將來を暗示することの多い彼女の著書は、羽が生えた様に飛ぶといふ現今の我が婦人界である。經濟的獨立と婦人参政權要求の聲は響々として喧しい。現に我が國でも、第五十九議會に於いては婦人公民權賦與に關する法案が上程され衆議院だけは無事に通過した。

更に教育の發達と普及とは、婦人をしてその社會に對する關心を深からしめ、社會意識を自覺させ、婦人も亦奮い鼓を破つて、社會に出て働かねばならぬといふ心を引き立たせてゐることも事實である。

更に經濟的原因について調べてみよう。これには一般的なものゝと特殊なものゝとがある。一般的なものゝといふのは現代の社會經濟の組織である。その發生の當初に在つた産業革命の事情と、現下のいはゆる資本主義經濟組織である。また特殊なものゝといふのは、極く最近の深刻なる經濟的不況である。

十八世紀の英國に於ける蒸汽機關の發明は動力界の革命となり、紡績機械の打ち續いての新發明と改善とは相俟つて、當時の産業界を一變せしめ、延いては社會一般に對して一大衝擊を與へた。

手工業時代にあつては、婦人は主として家内にあつて働くだけであつたものが、こゝに於いて機械の發明と工場組織とは、從來の婦人労働の地位や事情を一變せしめた。すなはち彼女らは自己の家庭を離れて働かなくてはならなくなつた。また極度の分業方法の採用と職業の分化とは各自の仕事が容易ならしめた。従つて幼弱な少年少女をも家庭から驅り出し、仕事の容易な割合には固定された賃銀を得ることが出来るやうになつた。けれどもこの結果一定の時間を工場の中に縛られるといふことになり、また不熟練な婦人や子供でよいといふことになつて、成年男子を却つて排除して産業豫備軍の方へ廻すといふことになつた。これでは益々家庭が破壊されるだけである。こゝに家族制度にも自然動搖を來さざるを得ないことになつた。

これは單に遠くして古い英國に起つただけのことではなく、何處の國でもこの例に洩れない。我が國の産業發達の裏にも、やはりこの様なことが無いとは決して云へない。

兎も角も、産業の近代的發達に伴つて婦人の力が益々需要されるといふことは蔽ふべからざる事實である。更に、現代の經濟社會組織を考へて見るに、いはゆる資本家制組織であつて、こゝに於いては、一切のものが貨幣支配の下にあり、また苟くも産業と名のつく限り如何なることも悉く營利を目的としてゐる。また被傭者は一定の労働力を賣ることによつて、その報酬を得るといふ立場に常に立つ。「賣らん哉」主義と「營利」主義との爲めには生産費を出来るだけ低減せしめる必要に迫られ、従つて労働賃銀は次第に引下げられる運命にある。また近代工業の進歩は益々分業を可能ならしめた。その結果は不熟練労働者を需要するに至つた。これらの諸事情が相俟つて、廉い賃銀を以ても應需するところの婦人群に對して、その手がさし展べられるに至つたのは蓋し當然なことである。群をなす産業豫備軍を超えて婦人

がなほ無限に要求されつゝある現在の状態がこれを雄辯に物語つてゐる。

更に現下の経済的不況は、益々深刻を極めるに至つた。歐洲大戰以後、不景氣の嵐は吹き荒び、世界經濟に乗り出してゐる我が國もこの影響を受けなはぬなかつた。かてゝ加へて關東の大震災は、その経済的中心地を一瞬の裡に破壊し盡した。かくて、とに角、昨今の経済的事情は、あらゆる産業界を萎靡沈滞せしめ、社會の隅々までも、底をツク不況に喘がしむるに至つた。これが、小さい一個の家庭の中にも襲ひ來つて、可憐なる乙女等をして街頭に立たしむるに至つたのである。また力と頼む夫は失業する——これは知識階級と筋勞階級とを問はない——勤務先の一片の「都合により」の辭令が積り積つて群がる失業群を造り出した。病人も出来るであらう。學校へ行かねばならぬものもある。そこで、妻は夫に代つて、子供は親に代つて働きに出ねばならぬ。暗い家計を背負つて立つのである。結婚の準備のためとか、社會的活動を欲してといふ様なものゝ數は、百人の中僅かに五人にも足りない（本調査、就職の目的の項参照）その殆んど全部が「家計の補助のため」といふのを見ても、その間の事情が如實にわかるではないか。

然らば、この様な種々なる原因の下に發生したる職業婦人は現在如何なる地位にあるか。これを再び社會的に、経済的に、及び一般經濟社會に於ける婦人の地位にといふ風に考へて見ようと思ふ。

まづ現代の社會は、大體に於いて男性中心の社會である。男性には働き良い様に出來てゐる社會である。そこで、この中に出て立ち働かねばならぬ婦人の立場が、可成りに困難であらうといふことは想像するに難くない。なほ婦人自身としても、家庭的、身體的な障碍が多く、そのために諸種の特別な待遇を要求し、従つてその収入や昇進又は地位等に於いて、普通男子に比して劣つてゐるのである。この様にして、雇主側からも、婦人は細心にして注意深く、また眞面目で熱心で

あり、また賃銀も比較的廉くて済む等々の有利なる點を有ち乍らも、勤続年限短く、獨創力と統制力が欠如してゐる等の短所を有つてゐるといふ報告に接してゐる。（本調査、雇主側から見た職業婦人の長所、短所 参照）

これらの婦人にとつて不利なる點も、考へ様によつては利益にもなる。といふのは婦人はかく不熟練なるも廉く雇ひ得るといふことが、彼女らに職を興へることもなるからである。

たゞ、こうした以外にも、婦人は男性社會に於いて働くのであるからして、その意味に於いても、婦人が職業に就くといふことは既に一つの戦ひなのである。

更に、これを個人的、家庭的な立場に於いて見よう。すなはち、彼女らの働きが家庭經濟の上に於いて如何なる地位を占めてゐるかである。

婦人の収入は現在のところ男子に比して大體に少い。例外は随分多くある。けれども本調査の結果から見ても、一人平均月額給料は三十圓七十五錢である。また収入總額を見ても、三十圓からせいゝ三十五圓までのものが一番多い。彼女等の就職の希望に於いても初めから「家計の補助」である。

ところが更に考へてみるに、「家計の補助」とはいふけれども、實際は、何も自己の諸經費を差し引いた残りを家計に補助するといふのでは決してなく、彼女らの多くは自家に在つて、その住居費も食費もキツちり拂ふといふものは極く少い。この意味では、彼女らの働きが齎らす収入といふものは、單に家計のマイナスの量を幾分でも少くするといふ意味に解さるべきである。

といふのは、彼女らの収入を見るに、却つて「家庭よりの扶助」といふがある。一見甚だ矛盾してゐる様だが、これが如實にその間の事情を物語つてゐる。すなはち、彼女らの働きは決して経済的獨立を可能ならしむる程の収入を得るのではないことは勿論のこと、更に家庭に對しては、單に自己掛りの經費の幾分かを補填するといふ意味なのである。

かくて、婦人勞働の現状にあつては、これを家計方面から觀察することによつて、婦人は未だその多くが家計に僅かの補助を行ふといふ以上に出でず、彼女等は依然として未だ家庭の人であるといふことがわかる。

更に眼を大局に馳せて、一般經濟社會に於ける勞働婦人の力といふ點について調べてみようと思ふ。すなはち現在の我が國に於いては産業上婦人がどの位の關與をなしてゐるかについてある。尤も、この點については後の「最近に於ける職業婦人の趨勢」を述べる際に、やゝ詳細に觀察して見たいと思ふ。そこで以下は、その概觀をするに過ぎない。まづ我が國全體の人々の中、女子の有業者はどの位あるか。これについては正確なことはわからないとしても、まづ大正九年の國勢調査の結果により、産業別に本業者を採つて見ると、上段記載の如くなる。

これによると女子有業者の總數は、九百七十萬一千三百三十五人であるが、この時の女子總人口（内地）は二千七百九十一萬八千八百六十八人で、これに對する割合を見ると、三五％に達してゐる。すなはち、全體の三分の一以上が有業者なのである。次に、我が東京市に於いて見るに上段記載の如くなる。

全國女子有業者 大正九年十月一日現在

産業別	女子有業者數	總有業者數ニ對スル割合%	産業別割合%
總計	9,701,335	35.4	100.0
農業	6,368,733	65.7	65.7
水産	4,239,697	43.7	43.7
工業	1,862,905	19.1	19.1
商業	1,099,683	11.3	11.3
交通	307,807	3.2	3.2
公務	307,807	3.2	3.2
其他	1,140,633	11.7	11.7
家事	2,140,633	22.0	22.0

東京市に於ける有業者 大正九年十月一日現在

産業別	女子有業者數	實數	割合%
總計	2,373,333	2,373,333	100.0
農業	1,236,667	1,236,667	52.1
水産	411,111	411,111	17.3
工業	215,556	215,556	9.1
商業	117,778	117,778	5.0
交通	61,889	61,889	2.6
公務	61,889	61,889	2.6
其他	215,556	215,556	9.1
家事	411,111	411,111	17.3

東京市に於ける大正九年十月一日の總人口は、二百十七萬三千二百人であるが、その中職業を有するものは九十萬八千四百四十二人、更にその中女子有業者は十三萬七千三百七十三人である。總人口に對する割合では、男子有業者は八一・一八％であるのに對して女子は一七・八二％である。また女子有業者は女子總數に對しては僅かに一三・七一％を占めるに過ぎない。

次に全國及び東京市の女子有業者について比較して觀るに、まづ全國に於ける女子有業者割合が三五％にも當つてゐるのに對して、東京市に於いては、僅かに一三・七一％である。またこれを産業別に觀るに、全國に於いては農業が最も多い。そうして、その次が工業の一割六分、商業の一割である。東京市の場合には、商業が斷然多くして、女子有業者總數十三萬七千三百七十三人中、四割近くを占めてゐる。その次が工業の三割近くと、公務自由業の二割とである。またこれを男子と比較して觀ると、男子は反對に工業が最も多くて四割を占め、その次が商業の三割である。

今比較的、統計的調査の完備してゐる工場勞働に就いて觀れば、使用職工數五人以上乃至五人以上の職工を使用し得る設備を有する工場に働く全國男女職工數は昭和四年末現在に於いて百八十二萬五千餘人であつて、うち男工八十五萬五千餘人（四六・九％）、女工九十六萬九千餘人（五三・一％）といふ割合を占め後者が前者を凌駕するを見るのである。殊に本邦重要産業の隨一たる紡織業に於いては職工數九十九萬七千六百九十人中、男工は僅かに十八萬三千八百八十九人（一八・四％）なるに反し、女工は其の約四倍の八十一萬四千五百一人（八一・六％）に達し、『乙女の腕もて紡ぎだす國の富』の唄の我を欺かざることを痛感する。是れ畢竟するに日本の工業の第一線に立つて工場内に立働く勞働者の半數以上が可憐なる女性であることを想ふ時、又彼女等が此等の生産的活動以外に母性として、將又家庭の主婦として婦人獨自のより重大な責任を負ふことを考へる時誰か一種嚴肅な感慨に衝たれないものがあらうか。

全國男、女工數產業別割合 (昭和四年末現在)

産業別	職工數		割合
	總數	女	
總數	1,831,033	825,187	100.0%
紡織工業	97,666	84,501	100.0%
金剛工業	90,996	83,374	100.0%
機械器具工業	120,156	117,214	100.0%
窯業	7,017	5,555	100.0%
化學工業	13,350	11,660	100.0%
製材及木製品工業	8,996	7,115	100.0%
印刷及製本業	5,015	4,473	100.0%
食料品工業	149,966	131,611	100.0%
瓦斯及電氣業	8,036	7,956	100.0%
其ノ他ノ工業	91,835	43,656	100.0%

第三節 婦人問題の動向と職業婦人

一口に婦人問題といつても、それには種々なものがある。婦人に關する考へ方は、随分古くから幾度か變遷したものである。或ひは古代の母性中心社會から、中世に至つては極端なる父權中心となり、更に近世に及んでは自由主義的な考へ方になつたといふ。また最近に於いては、或ひは社會組織上から、政治上、法制上、經濟上、又は倫理上等各方面から、

婦人に關する問題が論議されてゐる。けれども、これを要するに近代に於ける婦人問題として誰れもが考へるところは、まづ婦人參政權問題、婦人教育問題と廢娼問題などが社會的なものとして、また婦人職業問題及び母性保護の問題が、經濟的なものとして考へられるようである。

こゝに特に婦人職業問題の重要性を唱へやうといふのは外でもない。これが最近に於いて特に顯著なものとなつたからである。經濟問題こそ、最も基礎的で中心的で、そして身邊直接の問題として、日常われ／＼に迫る問題だからである。何故婦人職業問題が特に重要となつたか、については後に詳しく述べるであらうが、とに角昨今の不況が特にそれを齎らしたといふことは、何人も疑はないところであらう。或者は、これは一定の社會制度の缺陷が齎らしたところの必然的な現象として、不熟練労働者なる婦人をのみ需要するからだといふ。とに角、婦人従業者の數は日々に激増してゐるといふ事實が、何ものにも勝つて、この問題の重要性を物語つてゐるのであらう。

では婦人職業に關する問題とは何かといふに、これも亦種々あることであらうけれども、職業婦人の發生に關するもの、婦人の經濟上占める地位、またはその勞働賃銀や勞働時間、或ひは保健、設備に關するもの等となるであらう。これに關聯しては、母性保護に關するもの、保護法制、又は家庭に關するもの、及び家族制度への影響及び結婚問題、更には經濟的獨立の可否等がある。

併し、婦人職業に關する問題を考へるに當つても、未だ判然とした思想があるのではなくして、やはり一般の婦人問題に關する思想によつて影響されてゐるものである。

インセンの「人形の家」は單に自由を求める婦人の解放といふことを取扱つてゐるに過ぎないのであつて、未だ經濟問題とは縁が遠い。更に英國では、彼のフェミニズムの論者ジェ・エス・ミルが婦人解放論を著した。けれどもこれは、婦人の法律的同權のうちに、その人間的自由を要求した要するに婦人の自由要求の主張である。これ亦婦人の職業について直

接に述べられたものでないことは明らかである。

またエレン・ケイ女史は、性的差別に基く女性特有の使命を根據として婦人の地位を決定しようとして、観念的ではなく、極めて現實的に説明した優秀なる論著を表はした。けれどもこれも亦、要するに婦人の性を中心に述べられたものである。ところが彼のベーベルの婦人論、すなはち「婦人と社會主義」は一八七九年に出版されたものである。これは現代に於いても婦人と經濟との關係を考へるものにとつては、立場の如何に拘はらず一度は問題とし、これに準據するといふ意味に於いて、重要なものである。

この書の第一編では「過去の婦人」を論じて從來の歴史上の謬説を是正し、その過去に於ける社會的地位及び力量に關する世人の先入主的見解を打破せんと試みた。この點に於いてはまづ一般の婦人解放に關する著書と異らないが、第二編の「現在の婦人」に於いては、實際の婦人の生活状態を示して、單に性としての婦人や家庭の人としての婦人から、進んで婦人の職業上の地位なるものに筆を及ぼしてゐる。そこではまづ「婦人勞働の發達と普及」、次いで「既婚婦人の工場勞働、家庭工業及び健康上危険な工業」と題してゐる。かくて明瞭に婦人問題について、經濟的立場に立つて論じてゐる。而して遂には「將來の婦人」なる題下に、

「婦人はその希望や天性や能力に適應した職業を選択し、男子と同一條件の下に勞働する一個の實際的な勞働婦人として、何等かの産業的活動に従事しながら、第一第二の時間には教育者及び保母となり、第三の時間には科學及び藝術を研究し、第四の時間には或る行政的職分に盡すこともあらう。そして彼女は、自分から求めてゐる時、または機會が向いた時に、勉強し、勞働し、他の婦人又は男子と共に楽しんだり休息したりするのである」といつてゐる。また彼は職業婦人の出現に伴ふ結果については、

「産業のすべての部門に、婦人勞働者が非常な勢で増加してゆくのを、男子勞働者が喜ばないのは當然である。婦人勞



働者が産業方面に發展するにつれて、勞働階級の家族生活は分裂せられ、結婚や家庭は自然の結果として破壊される」と論斷して、職業婦人の出現は家庭や結婚を破壊するといつてゐる。また彼は未婚婦人と既婚婦人とを比較するに、マルクスの語を引用して、

「既婚女子は未婚者よりも遙かに注意深くして働き易い。彼女（既婚）は子供の可愛さにひかれて、その生活に必要なものを稼ぐためには力の限り働くのである。従つて男子勞働者はもとより、未婚の女子勞働者でさへ承知せぬやうなことにでも、彼女は唯々として服従する」

「女子は男子よりも忍耐強く、敏捷で、趣味が發達してゐる。かういふ資格のために、男子よりも女子に適した仕事が多かるのである」といつてゐる。

かくて、ベーベルは要するに、その立場たる社會主義の見地からして女子も亦男子と同様に勞務に従事することが出來、また勞働すべきものであるとなし、且つ現状に於いては女子の方が却つて男子よりも勞働市場に於いては需要が多くなると云つてゐる。けれども彼女らも女であり、その多くは家庭を持つてゐるのであるが、かくて、入りては男性に、出でては不利なる勞働條件のために、二重の壓迫の下にあるといふ。

彼のこの思想は、その後婦人問題を論議する者の何れもが多少かれ少かれ繼承してゐるといふ意味に於いては重要なものである。

例へば彼の思想を引いてゐると思はれるところのアメリカのフィリップ・ラッパポートの著書「社會進化と婦人の地位」も大體に於いて前掲と同一趣旨であるけれども、其を現代の事情に適應せしめたといふ意味に於いて傾聴すべき物がある。

彼は特に職業婦人の輩出が家庭の破壊を招来しつゝあるといふ點を指摘してゐるが、その一例をとつてみると、

「ニュー・イングランドの謂ゆる女町（The Town）の一つを訪ねてみるがよい。そこでは妻や娘が紡績工場に通つてを

り、男子は職が無くて家事にたづさはつてゐる。かうして是等の人々が家族から引き裂れてゆくその結果は恐るべきものがある。妻や子供が彼等一家の生計を立てるために、工場労働に雇われてゆき、朝は早く家庭（何といふ家庭だらう）を出て、夜は晩く疲れ果て、工場の塵と埃にまみれて歸つてきて、それから多分まづ第一に夕食の心配をしなければならぬといふ境遇では、どこに家庭生活の幸福が残されて居るだらう」

事實はこれよりも、もつと悲惨なことがあるであらう。けれども今はそんなことを詳しく述べてゐる暇はない。要するに彼もまた、社会主義の見地に立つて婦人の地位の變遷を歴史的に述べ、資本主義と家庭の破壊について特に詳論し、結婚難と獨身者の増加及び婦人労働と小兒労働との關係を述べ、延いては社会病としての離婚の多いことを述べ、遂に社会進化に伴つて、新しき文明の下に於ける婦人解放の可能を論じてゐる。

かくの如くにして、社会主義的な論調の傾向は近代に至つて益々甚だしくなり、遂にソビエト露西亞の成立と共に、世界最初の女大使ア・コロンタイをして、『婦人労働革命』と題して最も急進的な將來社会に於ける婦人を描かしめた。ここに於いては、もう婦人は常に働いてゐる姿に於いて扱はれてゐる。何らかの職業を持つことによつて社会の有力なる構成員としての立場を保つのである。かくて、また彼女は「母性と社会」について、特に母性としての労働婦人に對する國家の法律的又は保健上の保護の必要を高唱してゐるのである。かくて彼女は職業婦人に關する徹底的見解を持ち、全く婦人の解放も獨立も、經濟的確立に基くものとして、

「婦人の地位は、常に彼女の經濟上の職分によつて決定される。」と喝破してゐる。

かく述べ來つたのも要するに歐米に於ける最も特徴ある説として人口に膾炙してゐるもの、二三を述べたに過ぎない。

そしてまた、我が國に於ける婦人問題に關して代表的見解を持ち、徹底的見解を吐くものは、直接か間接かに是れ等の影響を受けてゐるものであつて、獨自の見解を持してゐるものは極く少い。

けれども我が國の現状については、温健にして而も獨自なる立場に立つて見解を發表してゐるものも絶無ではない。極端なる保守的立場を維持するものを除いては、大體に於いて自由主義に立つものが多い。ところが婦人問題一般を論じたものは多いが、特に經濟問題を中心にしたものといふのは極く少いようである。

しかし極く最近に發表された富岡瑠璃子氏の「當來社会と婦人の覺醒」の中より、その自由主義的立場からした男女平等論の一例として「職業の上から見た男女」がある。いまその中から次の一例を引いてみよう。

「如何なる職業も男子のみならずべきものと定つたものではないといふことを大呼する。現在の制度では男子は自由に何れの職業をも選ぶことが出来るが、女性は妻となれば夫の許可を必要とするものがある。職業はもと人の生活の爲めのものである以上他人の許可を得なくては出来ないといふべき問題ではない。若し妻が夫の許可を得なければならぬとすれば、それは許可ではなくて夫と妻との相談によつて定つた對等的のものでなければならぬ。假令現在社会が下等な職業であると目してゐるカフェエーの女給も男子の料理人と何等選ぶ所はない。男子の料理人、女子の女給、大學の先生、政府の役人、皆同じく一個の人格者である。大學の先生なるが故に偉くはない。女給なるが故に卑しくはない。例へば大學の堂々たる先生が妾を置いたり他人の妻を奪ひ或ひは妻を捨て、他の女に走るといふ様な倫理道徳を無視した非人道的行爲と、女給が親を養ひ弟妹を教育する爲めに其の生活費と教育費とを得るために、心ならずもカフェエーに働くといふ心根とを比較したならば、それでも大學の先生は立派な人偉い人と思ふものは恐らく眞の人間ではないであらう。と同時に女給の美しい努力に涙ぐましい同情をよせる事であらう。我らは職業の貴賤貧富を考へるよりは、如何にして職業を人格的に神聖化したならふからうかといふ事を考へた方が社会的に益する事であらう」